

<論文>

「円本」と翻訳文学規範

Yen-pon and the Norms of Literary Translation

佐藤美希

(札幌大学)

Abstract

In the early Showa-era, the Japanese publishing market experienced what was then referred to as the ‘*yen-pon* boom.’ ‘*Yen-pon* (literally, one-yen book)’ means a series of selected literary works sold at a price of one yen apiece. The price was reasonable so that general readers could readily afford to read canonical works. This new type of publication exerted great influence upon literary circles.

This paper will analyse, by examining ‘paratext’ such as statements on translation and on foreign literature in leaflets supplemented to each volume of *yen-pons*, what policy and norms of translation the publishers formulated in the *yen-pon*. It will also illustrate that publishers gained more control over the act of translation, aiming at widening the literary market for ordinary readers and at the same time enlightening the readers by means of source-oriented approach toward translation that academics adopted to their research.

1. はじめに

大正 15(1926)年から昭和初期にかけて相次いで出版された一卷一円の文学全集、いわゆる「円本」が当時の日本の出版界を席卷し一般大衆の文学受容を拡大させた諸相は、既に複数の研究で明らかにされている (e.g. 紅野 1999; 2009、永峰 1999; 2010、山本 2000 など)。そうした先行研究の多くは、円本の嚆矢とされる改造社『現代日本文学全集』を主たる考察対象にしながら、当時の読者層の拡大や出版市場の分析といった日本文学「場」の変容や、いわゆる「円本ブーム」によって日本の作家達が直面した状況などについて、当時の社会状況に照応したメディア論や大衆文化論という立脚点から主題化している。他方、円本には外国文学の全集も含まれており、当時の日本の外国文学受容という点から見ても、円本が外国文学の普及および外国文学観・翻訳観の形成に影響を及ぼしたこともまた注目に値する。本論では、多くの読者を獲得して外国文学の受容を広げた円本が、外国文学受容や翻訳に関してどのような姿勢を示していたのか、円本の付録である月報や円本の広告などを分析対象として考察する。

2. 円本

「円本」とは、大正末から昭和初期にかけて、一冊一円という比較的安価で毎月ほぼ一冊ずつ配本された全集ものの総称である。大正 15 年 12 月 25 日に第 1 巻を創刊した改造社『現代日本文学全集』の予約部数が 25 万部（犬塚 2009, p. 258）といわれ、それ以前の予約全集本の会員が数千人程度だった（岡野 1981, p. 348; 永峰 2010, p. 18）ことと比較すると、いかに大きな市場的成功を収めたかがわかる。この成功を目の当たりにした他の出版社も同様の全集を次々と刊行して後に続き、大小合わせて 200 以上の円本が登場したとされている。その内容は文学に限らず、春秋社『世界大思想全集』や改造社『マルクス・エンゲルス全集』『経済学全集』、平凡社『世界美術全集』をはじめ、哲学、思想、社会科学や芸術、地理、歴史などを含めた幅広いジャンルに至っている。

こうした文学以外の円本も翻訳テキストを掲載しており、翻訳受容や翻訳観の形成と無関係ではない。しかし本稿は翻訳と文学受容という立脚点から考察するものであり、考察対象は外国文学の円本全集に限ることとしたい。外国文学の円本としては、『現代日本文学全集』刊行直後の昭和 2 年 3 月に新潮社による『世界文学全集』、同年 6 月に第一書房『近代劇全集』と近代社『世界戯曲全集』、翌 3 年に改造社『世界大衆文学全集』などが上梓されている。

円本は『現代日本文学全集』の成功以降も大衆読者の心をつかみ、昭和 2 年 5 月に発行を開始した平凡社『現代大衆文学全集』も初版予約が 25 万部、新潮社『世界文学全集』に至っては予約部数 58 万部という空前のベストセラー現象を生み出した（小林 1976, p. 45）。しかし、出版業界は円本で飽和することにもなり、途中解約などで販売部数を伸ばせない円本もあった。第一書房『近代劇全集』や近代社『世界戯曲全集』はその部類に入ってしまう（藤木 1991, pp. 380-381; 関口 1991, p. 635）。

永峰重敏によれば、当時の大衆層を想定したメディアの価格設定として、大正 13 年に発行部数 100 万部を達成した『大阪毎日新聞』の購読料とラジオの聴取料がそれぞれ一ヶ月一円、雑誌『中央公論』と『改造』が一冊 80 銭（昭和 2 年に 50 銭に値下げ）であったという（永峰 2010, p. 2）。同時期の単行本一冊の相場が約 2 円から 2 円 50 銭、煙草一箱 15 銭、また同時期に登場した「円タク」と呼ばれ大阪や東京などで一定地域内を一律一円の料金で人気を博したタクシーなども併せて考えれば、この一円という価格設定は、大衆にとって安価とは言えないまでも決して日常的に全く手の出ない価格ではないことがうかがえる¹。新聞紙上に度々掲載された広告においてもこの価格設定が強調されており、これが十分な宣伝効果を上げたと考えられる。

こうして円本全集は大衆に文学受容を拡大させていくことになるのだが、ここで特に文学全集／選集の役割について触れておきたい。デイヴィッド・ダムロッシュ（David Damrosch）

は20世紀アメリカで出版された文学選集のラインナップや編者方針について事例を挙げながら、文学選集が一定程度の権威として機能することを論じている。特に外国文学の場合には、全集／選集が「世界文学」というジャンルを規定するとともに文学カノンや文学観をいかに形成してきたかが明らかにされている (Damrosch 2003, pp. 118-144)。当然のことながら、ここでは出版社や編集者の出版意図や編集意図の影響力も強調されている。

文学観の形成に加えて、外国文学の全集／選集に収録されるテキストが翻訳であるという当然の事実を踏まえれば、外国文学全集が当該目標文化における翻訳観の形成にもひとかたならぬ役割を果たしたと考えられる。その点について、円本の場合は「月報」というテキスト群がさらに興味深い事例を提供している。月報とは、当時の各円本が毎月の配本時に付属で配布した8ページ程度の小冊子で、全集に掲載されている作家や作品、その時代・文化背景についての詳細な解説や、かなり専門的な文学論、または読者の投書なども収録された。外国文学の円本の場合には、他に翻訳論や翻訳批評、翻訳者自身による随筆なども頻りに掲載され、中には編集者や翻訳者を交えた座談会記録などが含まれることもあった。こうした文学や翻訳に関わる多様な言説は、円本の編集・出版において翻訳がどのようなものと考えられていたのか、背景にある意識を必然的に投影することになるだろう。上述したように円本が多く読者を獲得していたことを併せて考えれば、こうした言説が外国文学観や翻訳観の形成に大きな影響力を持ち得たことが仮定できる。

3. 翻訳規範(translation norms)とパラテキスト(paratexte)

翻訳観の形成を考える上で有用なのは、翻訳研究(トランスレーション・スタディーズ)で論じられる翻訳規範(translation norms)という概念であろう。これはギデオンのトゥウリー(Gideon Toury)が社会学における「規範」概念をもとに構成したもので、「何が正しいかあるいは間違っているか、何が適切かあるいは不適切かについて、あるコミュニティ内で共有されている一般的な価値や思考であり、ある状況にとって適正で適用可能な行為の指針」と定義されている(Toury 1995, p. 55 日本語訳は筆者)。翻訳規範は固定的なものではなく、当該の文化・時代状況に即して様々な翻訳観がぶつかり合う「交渉」を繰り返しながら構築、強化、あるいは変更される流動的なものである。

トゥウリーは翻訳規範を次の三種類に区分している。起点志向か目標志向かという初期規範(initial norm)、翻訳実践の前段階での翻訳政策／方針が含まれる予備規範(preliminary norms)、実際のテキスト変換に関わる運用規範(operational norms)である。運用規範は実際の語彙や文レベルの訳出方法と関わる具体性があるが、予備規範や初期規範はどちらも目標文化の翻訳方針や翻訳観(文学翻訳の場合は当該文化の文学観や文学受容状況も含む)と関

わるもので、二者の区別自体が日本の翻訳状況を考察するに当たって有効な概念分類かどうかは検討する必要があるだろう²。ただ、正しい翻訳とは何かという思考は社会的・文化的・イデオロギー的に構築されるとするテオ・ヘルマンズ (Theo Hermans) の説明にしたがい

(Hermans 1999, pp. 84-85)、本研究では、初期規範／予備規範の区別にかかわらず、実際の訳出以前に翻訳がどうあるべきと考えられているかに関する何らかの外的な前提という広い意味で、翻訳規範という概念を用いることとする。

ある翻訳テキストに作用している規範を抽出する方法論として、トゥウリーは翻訳テキストと翻訳外のテキスト (翻訳に関わる人物による言説や翻訳批評など) という二種類のテキストの分析を挙げている。トゥウリーは、後者のテキストは見方が偏っていたり不完全であると否定的に見ているが (Toury 1995, p. 65)、こうした翻訳を外的に取り巻くテキスト群は翻訳テキストがどのように読者に提示されるのか、ひいては目標文化の社会が翻訳に対してどのようなあり方や機能を求めているのかを明らかにできるという点で、翻訳規範抽出のための重要な分析対象である (Tahir Gürçağlar 2010, p. 113)。

このようなあるテキストを取り巻く外的テキストをジュネット (Gerard Genette) はパラテキスト (paratexte) と定義している。パラテキストとは、あるテキストについて何らかの情報や関連性を伴ってそのテキストを補強するもので、「作者名、タイトル、序文、挿絵など」が例として挙げられる。ジュネットによれば、文学作品が「裸の状態」で提示されることは滅多になく、たいていの場合「テキストのより正しい受容とより妥当な読みのために大衆に働きかける」パラテキストが付随するのであり、それは「世界におけるテキストの存在とその『受容』および消費」を保証する (ジュネット 2001[1987], pp. 11-12)。つまり、パラテキストによって読者がある作品に対する予断を抱き、それが作品評価や購買意欲にさえ影響を及ぼすことがあるだろう。また、ジュネットが注意しているように、そうした「働きかけ」が理解され成功するかどうかは別の問題である (ibid., p. 12)。翻訳文学に関していえば、パラテキストに翻訳についての言説が含まれていれば、読者がそれに基づいて自分の翻訳観を形成する場合もあり得るだろうし、またはそこに提示される言説がその時代に一般的な翻訳観と一致するかどうかで作品の評価も変わり得る。こうしたパラテキストの作用が外的な翻訳規範形成を担っている。

パラテキストは二種類に分類される。あるテキストに付随しながらそれについての何らかの情報や関係性を提示するペリテキスト (péritexte) と、テキストには付随せずにそれについての情報や関係性を示して外的に流通しているエピテキスト (épitexte) である。上述した円本の月報は、付録として各巻に必ず同梱されていたという点ではペリテキストであるが、別の冊子体である限りは円本本体と離れて流通する場合もあり、その点ではエピテキストとも言

える。いずれにせよ、テキスト本体と近接するパラテキストであることは事実である。本稿では、こうした円本の月報に掲載された言説をはじめ、宣伝広告や内容見本をパラテキストの一例と位置づけ、そこから円本が提示する翻訳規範を考察する。特に、58万という予約購読者を獲得し相応の影響力を読者や市場に対して持ち得たと考えられる新潮社『世界文学全集』の広告や月報（「世界文学月報」）を中心とし、関連する場合はその他の円本も交えながら、そこに書かれた言説を考察していく。

4. 円本が示す翻訳規範

4.1 翻訳の大衆化

円本が出版メディアを席卷した要因として第一に挙げられるのは、出版社が文学の大衆化を大々的に標榜したことである。改造社は『現代日本文学全集』発行に際し、「今や文学は一部有閑階級の独占することを許しませぬ。文学の民衆化！それが痛切に叫ばれてをります」「我社は出版界の大革命を断行し、特権階級の芸術を全民衆の前に解放する」といった煽動的な文言を用いて広告を打った（『改造』大正15年12月号—以下、引用内の旧字体漢字は新字体に直した）。改造社は、政治の民衆化を主張する民本主義が時代の潮流となった大正後期に、社会主義的で急進的な内容の雑誌『改造』を発行した出版社である。同社の社長山本實彦が関東大震災後の大衆向けに書物不足を背景にして円本の出版を企画したのだが（犬塚 op. cit., pp. 257-258）、それが多くの読者を獲得していた看板雑誌『改造』の急進的な社会主義思想ともつながり、さらに一冊一円という廉価と相俟って、「文学の民衆化」というスローガンが大きな功を奏することになったと考えられる。

外国文学の円本でも、その廉価であることと文学の「民衆化」「大衆化」スローガンの影響力の大きさは看過できなかったと見え、事実、創刊に際しては大衆にとっての入手しやすさが強調された。長くなるが、新潮社『世界文学全集』の出版前広告と、やや遅れて出版された近代社『世界戯曲全集』と第一書房『近代劇全集』内容見本の一部を以下に引用する。

吾々は日本人であると共に世界人だ。その世界人としての資格を全うせしめる教化機関は翻訳文芸の外にはない。翻訳文芸が西洋料理と一緒に消化し難いものだと思はれていたのは、明治の昔のことで、昭和の今日では、洋食も翻訳も余りに必要な日常糧食だ。紅葉露伴を読まない者はあつても、ジヤンバルジヤンを知らない者は、子供の中にもゐないはずだ。その貴重な糧に従来の如き不廉の値を課することは、国民生活の一脅威だ。小社即ち本全集を刊行して、訳稿一千三百枚のものを壺円で提供する。英国のエベリマン叢書と量も定価もほゞ同一だ。が、いくら廉価でも内容が粗悪では、全国的消化

不良を招かざるを得ない。絶対の良質品を断然たる廉価に！これを本全集の
スローガンとする。

(『世界文学全集』広告 東京朝日新聞 昭和2年1月29日)

「日本語を話す凡ての人への贈物・一般大衆への新進出 「世界戯曲全集」
の大出版」 ▲本全集の社会的意義▲

思潮の推移、社会の変動の現代ほど激しい時代はありません。このときに当
たつて、私共は日本人であると共に世界人であるといふ自覚を持つて、社会
の正しい姿、人生の全局面を見なければなりません。そのためには、是非と
も広く世界各国の社会相を知り、歴史の展開を見究める必要があります。

[中略] 芸術と社会との交渉の重要視せられる今日、戯曲および演劇の社会
に於ける重大な役割が認められて来たからであります。劇場へ行く暇のない
人でさへ、戯曲を貪るやうに読んでいるのを見てもこの事は十分に解ります。今や戯
曲は現代人の生活の必需品になりました。この時に際して、世界のあらゆる戯曲を網
羅した『世界戯曲全集』の刊行を企て、一般民衆の読み物として誰でもが容易く購ひ
うる廉価で出版する事は、慥かに時期を得た企てであつて、万人の望んで止まなかつ
たものである事は疑を容れません。

▲万人のための計画▲

最近廉価版の流行を来たし、簇々として廉価版の出版を見るに至りました。小社とし
ては単に時の勢に駆られた流行の渦巻に入るを欲しませんが、一面廉価版の出現は一
般大衆の要求に基くものと見なければなりません。併しながら、価格の低下に伴う内
容の下落は、寧ろ値の高きに及びません。ただ良き内容を安く分つ時に於てのみ、廉
価版の意義が生ずる訳であります。[中略] この[全四十巻の]豊富な内容を、一冊
僅か九十銭、全部で三十三円で分とうといふのです。これなら誰もが一日数本の煙草
を節約する位の金で購ひ得るのです。そして、電車の中でも、事務所や工場の片隅で
も読みうる手頃な製本。鮮明な印刷。あらゆる家庭に具へて立派な装飾となる美麗な
装丁。

(『世界戯曲全集』内容見本 pp. 2-4)

近頃所謂「一円本」がすさまじい勢で流行して居ります。その多くがともかくも古今
東西の名篇傑作の結集でありますので、かうして万人の宝とも云うべき名作の力が、
段段人々の心に浸み込んで普及されることは、何より喜ばしいことであります。[中
略] 抑も近代劇は広汎多岐に亘る近代文学中での好箇出色の題目で、而も新しい運動
の先駆をなして、民衆を動かし生活を支配し来つた、謂はば華々しい騎士であります。
遠くはイプセンの問題劇に発して、近くは表現派の運動に至るまで、近代に於ける文
学上社会上の新運動は、悉く劇場から生れたとさへ言はれる位、画期的に目覚ましい
ものであります。それが彼の地の世道人心に及ぼした影響はいふまでもなく、日本に

於てもその偉大な足跡は遍く力強く印されて来たもので、今では影の薄い舊劇の代りに、生々とした近代劇の題目やら性格やらが国民生活の一般常識にまで入り込んで居る有様であります。「新しい女」の名称を考へただけでも、思ひ半ばに過ぐるのであります。ですから、近代劇を知らずして現代生活を談ずることは全く不可能なことであります。
(『近代劇全集』内容見本 pp. 1-4)

これら三社の出版意図は多くの部分が共通している。つまり、外国文学は今や大衆の生活と密着している／いるべきものであり、そのために一冊一円という廉価（『世界戯曲全集』は一冊九十銭）を実現し、誰もが日常の中で容易に購入できる点を強調している。ただし、ここでの「大衆化」が示すのは、改造社のそれのように特権階級と大衆を対置することで大衆の地位向上と文学を関連させる社会主義的な意識³ではなく、外国文学を現代社会の理解と絡めて、より身近なものにするために文学と大衆を接近させようという方向性ではないだろうか。そしてそれを実現するために、従来の翻訳のあり方を変える必要性が声高に訴えられることとなる。

世界の傑作名篇を、少数の文芸愛好者より一般大衆の手へ——これを標語として小社は渾身の努力を捧げて居ります。従来の翻訳文の中には、普通日本文と可なり距離のあるものがあつて翻訳と云へば、直ちに難解であり晦渋であるものやうに思はれ、少数特殊の読者以外、これに遠ざかるやうな傾きがありました。本全集は、この弊を打破すべき使命を負へることを自認し、訳者と編集部と歩調を合せ、呼吸を揃へて大に努めてきましたが、果して第八回配本あたりから、殊に会員諸氏の認むるところとなつたことは、欣快此の上もない次第であります。

訳文は何でも平明にしなければならぬとは限りません。神秘的象徴的なものなぞは、自ら別ですが、平明である可きもの尚ほ且つ難解晦渋を以て読者を悩ましたのが従来の翻訳に少なくなかつたとすれば、本全集の此の用意は、無用のものでないことを信じてよかろうと存じます。

(世界文学月報 第10号「出版部から」昭和3年1月15日 p.7)

・・・『世界文学全集』刊行に際し、小社がモットオと致したのは、「翻訳の大衆化」といふことで御座いました。従来その特殊な翻訳文体の爲めに動もすれば難解苦渋に陥り、特殊の文学研究家乃至余程熱心な文学愛好者ならでは、親しまれ得なかつた翻訳文学を、一般大衆の読物たり得るやうに平明化すること、これ小社が、翻訳家諸氏と共に、意識的にいたした努力でありまして、此の努力は、本全集の成績を以て、實際的に報いられたので御座います。

(世界文学月報 第37号「第二期世界文學全集発表」昭和5年5月27日 pp. 4-5)

▲本全集の特色▲

我々はこれまで、如何に文学ならざる乱暴な訳語に悩まされて来たことでありませう。今日最も民衆に近づいてゐなければならぬはずの近代劇が劇場から放逐され、民衆から敬遠されてゐるのは概ね拙訳悪文に基因して居るのでありまして、これは誠に悲しむべきことであります。

▲翻訳の改造期▲

一体一口に外国文学とよそよそしく申しますけれども、実はその翻訳の如何によりましては自国の文学となり得る事は云ふまでもありません。名訳紹介が一国文学の先駆をなして、而もその国生えぬきの文学同様行はれてゐる例は諸外国に少なくありません。して見ますれば、名訳を持つことは取りもなほさず、日本文学の領土を広めることでありまして、反対に良い外国文学の翻訳を持たないとすれば、それはつまり大きな国民的損失であり恥辱であると申さねばなりません。吾々はいつまで孟浪杜撰な翻訳を忍ぶべきでありませうか。 (『近代劇全集』内容見本 pp. 4-5)

つまり、それまでに流通していた翻訳は研究者や特殊な読者にしか理解できない難解な訳文であったため、円本が掲載する翻訳は大衆向けに理解しやすい訳文にするということである。これは、円本における極めて明確な、新しい翻訳規範を表している。というのも、明治以降の翻訳者に関しては、黒岩涙香や森田思軒、若松賤子ら、研究者ではない著名な翻訳者の例もあるものの、多くは高等教育で外国文学を学んだ研究者達であったという事実がある⁴。例えば英米文学を例に取ってみると、明治中期に高等教育機関に英文学の学科が相次いで設立されるのと時をほぼ同じくして、明治初期の所謂「自由訳」「豪傑訳」を中心とする目標文化志向の翻訳には疑問が呈され、一字一句をおろそかにしないだけでなく、その内容や芸術性に至るまで忠実に原典を理解して精確な訳文を求める原典志向の傾向が強まり、文学作品の対訳や解説の出版が増加した。こうした翻訳規範の変化はおそらく、西欧化を目指しながら列強との比肩を目指す時代の中で、正確に西欧を理解することが不可欠であるという意識を背景とした学問分野としての外国文学の成立と無関係ではないだろう (佐藤 2006; 2008)。もちろん、ロシア文学の翻訳のように、学問分野としてというよりも日露関係を背景とした政治的な要請にもとづいて翻訳が発展した側面もあるが (小森 1997)、それでも正確な西欧理解を文学に求めたという点では立脚点が大きく異なるものではなく、明治後期から大正、昭和にかけての外国文学研究の確立と翻訳規範形成は無関係ではないだろう。そうした研究姿勢を背景としながら翻訳は研究者の仕事の一つとなり、翻訳は精緻に原文を理解する研究の成果として提示され、その精確さが別の研究者達が翻訳批評をする上での一つの指

針となる。こうして翻訳—文学研究—翻訳批評（翻訳論）が学究的な土壌と重なり合う中で、翻訳規範が形成されていったと考えられる。

このようにアカデミズムが牽引する傾向があった当時の外国文学翻訳状況の中で翻訳を刊行してきた出版社自らが、これまで続いてきた翻訳のあり方を上記の引用にあるように否定したのである。もちろん、その背後には、先行する改造社版円本の商業的成功によって明らかになった、大衆向けの出版で売り上げを伸ばすことが最も即効性があるということを追求める営利的姿勢があっただろう。その点で、上記引用に述べられた新たな翻訳観は、アカデミズムと商業主義的な翻訳姿勢が反目し、従来とは異なる大衆志向という翻訳観が提示された、新たな翻訳規範の交渉の場になっていると考えることができるのである。

4.2 大衆志向の背後にある学究的志向

このように大衆を志向した翻訳に舵を取り直したことが明言されているにもかかわらず、円本出版側は、以下の引用が示唆するような、矛盾とも言える姿勢を見せることとなる。新潮社『世界文学全集』を中心にその言説を以下に引用する。

大勢の読者の中には、初めて外国文学に接する人もある事だから、なるべく訳筆を和らげて貰いたいという希望を寄せらるゝ人もある。翻訳の生硬苦渋、もとより禁物だが、さりとて分かりやすくするために砕けすぎるのも困る。芸術の味わひは実に微妙の間に存するものだから、読者の程度などを目標にして筆を加減しては、この芸術味たちまち消え去つて了う。勿論、出来るだけ生硬に陥らぬよう訳者諸氏にお願いしている。〔中略〕多少むづかしい所や分かりにくいやうな所があつても、何うか暫らく我慢して読んでいただきたい。海外文学に親しみが深くなるに従つて、おのづから会得される事は疑ひのない所である。

（世界文学月報 第3号「校正と譯文」昭和2年6月15日 p.6 下線筆者）

古典を読み味わふ上には、いろいろの面倒が伴ふが、〔中略〕その古風なところに、また独特の風味がありもするが、今の文体に比べて、何ほどか分かりにくいといふ感じのあるのはやむを得ない。この点は、古典を読むに当たつて、読者の納得しておかなければならぬところである。それはわれわれの日本文学に就いてさへさうなのだから、況んや外国の文学となると、一層ものいひまはしに風変わりなところのあるのは自然である。それを日本風につぶしてしまへば、分かりは早いであらうが、古典の固有の風味は全く失はれて了ふであらう。外国文学のよき翻訳は、その外国風な、古風なもの言ひまはし方を、そのまゝに生かし伝えて、それでめて、落ちついて読みさへすれば、すらすらと分かるやうになつてゐなくてはならぬ。外国の古典の翻訳を

読むに当たっては、読者は日本現代の軽い読み物に対するやうなつもりでこれに向かつてはならない。或ひは冗長であつたり、まはりくどい言ひまはしがあつたり、無駄と見えることが多かつたりしても、そこにその時代のものの言ひぶりの特色があるといふ事を見なくてはならない。それなしには、古いものも新しいものも、昔のものも今のものも全く一様に書き直す外はなくなる。而して言ふまでもなく、それは眞に古典の本文に接することではない。〔中略〕古いものも新しい文体に書き直してしまへば、ざつと読むには容易であらうが、世界の古典の固有の風味や面目は失はれてしまふ。それ等の点を出来るだけ保留して全文を伝えるところに、『世界文学全集』の第一の特色があるべきである。

(世界文学月報 第4号 片上伸 「古典の文体」 昭和2年7月15日 p.1 下線筆者)

ここに書き込まれているのは、極めて原典志向の翻訳観である。外国文学の翻訳とは、原文に書いてあるまをそのままに生かし伝えなければならず、読者の理解しやすさよりも原典を忠実に再現することを求める姿勢が示されている。大衆志向を標榜する一方で、読者のために作品の翻訳を近づけるのではなく、外国文学の芸術性や固有の特性を優先し、それが難解なものであっても読者の方から外国文学作品に近づいてもらうべきという意識が読み取れる。翻訳は、作品を正しくあるがままに理解するためのツールであり、読者は忍耐強くその難しさに付き合わなければならないというのである。こうした翻訳観は、前述したような正確な原典理解を目指す学究的な文学受容と通底する姿勢ではないだろうか。

そもそも学究的な姿勢という点から見れば、外国文学の月報に掲載される記事にはかなり学問的な専門性を示す評論が目立つ。「世界文学月報」では創刊の第一号から三号まで木村毅による「日本翻訳史(一)～(三)」を掲載しているが(うち、一・二号は巻頭に掲載)、これは日本における「泰西文学の移入、乃至翻訳の概略」を扱ったものである(世界文学月報 第1号 昭和2年4月15日 p.1)。室町末期から江戸期、明治期の翻訳史の特徴を時に英訳と日本語訳の対照比較なども加えながら解説し、日本の学者による同時期のユーゴー評への反論も加えた、専門的な研究小論になっている。他にも柳田泉、片上伸、馬場孤蝶、本間久雄、宮島信三郎、昇曙夢らの他、多くの研究者らによる専門的な解説や文学論の掲載がその後も継続する。「近代劇全集月報」も同様で、創刊時から連続して長田秀夫「日本に於ける近代劇上演史(I)～(VIII)」(一～八号)や新關良三「近代劇概論」(七～十五号)といった演劇史解説や演劇論を連載し(特に「近代劇概論」はギリシャの古代劇からの系譜を扱う専門的な内容である)、その他にも掲載された戯曲に関する詳細な評論や解説が研究者や翻訳者達から寄稿されている。「世界戯曲全集編輯たより」でも、戯曲やその著者、あるいは作品の文化背景や起点文化での上演状況などについて詳細な解説が多く掲載されている。

以上のような学究的な作品理解を翻訳受容にも求める姿勢や、学問的な知識や研究成果を読者に提供する記事は、大衆志向を標榜しながらも大衆の文学受容に迎合しておらず、一見矛盾する志向に見える。これについては、改造社版円本が掲げた「文学の民衆化」というスローガンと外国文学の円本のそれとは異なる様相を持つことを前節で指摘したが、ここで再度その点を検証したい。

前節で引用した各社の広告や内容見本の言説を見ると、「吾々は日本人であると共に世界人だ。その世界人としての資格を全うせしめる教化機関は翻訳文芸の外にはない」「私共は日本人であると共に世界人であるといふ自覚を持つて、社会の正しい姿、人生の全局面を見なければなりません。そのためには、是非とも広く世界各国の社会相を知り、歴史の展開を見究める必要があります」「近代劇を知らずして現代生活を談ずることは全く不可能なことであります」など、外国文学を読者の身近なものにするという目的が、読者に世界や社会を理解してもらわなければならないという啓蒙的な意識とともに語られていることがわかる。上述したような学問的な記事の掲載や、翻訳受容に学究的な原典志向の正確な理解を求める姿勢は、こうした啓蒙的な意図と重ねることで理解できる。大衆を啓蒙するという目的であれば、学問的に外国文学の作品理解や背景知識などを提供することは当然の方策であろう。大衆化というスローガンとは一見矛盾して見えるアカデミズムからの啓蒙的な姿勢が、一冊一円という大衆向けの安価の強調の裏に明確に書き込まれていたのである。

関連して、翻訳に際して学問的な権威を強調するというアプローチも実際に見ることができる。例えば、近代社『世界戯曲全集』はその内容見本において「本全集翻訳の諸家氏名—原稿紙十万枚に近い大翻訳。これを完成する一流戯曲翻訳家の総動員—」とする一覧を付しているが、そこでは各翻訳者の氏名の上に「東京帝国大学教授 齋藤勇」というように所属大学名と職名を明記している（『世界戯曲全集』内容見本 p. 23）。ここに記載されている 78 人の翻訳者のうち 41 人は実際に各帝国大学をはじめとする大学や高等学校、高等師範などの教授・助教授が名を連ねており、その他にも「文学士」「文学博士」という肩書きを付されている訳者もいる。このように学界上の権威をわざわざ強調して宣伝することもまた、高名な研究者の手になる翻訳によって外国文学を通じて読者を啓蒙しようとする意識の表れと見ることもできるだろう。

4.3 編集・出版側からの翻訳への介入

円本の翻訳に関してもう一点着目したいのは出版社側の態度である。特に興味深いのは、新潮社『世界文学全集』の編集側による言説である。その月報の中で、同社がどのようなスタンスで翻訳の編集を行っているのかを読者に対して明確に示している。

…本社の全集に一卷翻訳を出された某氏は〔中略〕本社の全集では少くも十一二校、多くは二十校を超え、殆ど全部に亘り二回まで組みかえをしました。〔中略〕右の訳者は聞ゆる訳壇の大家で、社会的にも信用の高い人であります。本社は勿論その翻訳に多大な敬意を払って居りますが、併し決してそのまま印刷に附して了ふやうな事は致しません。調査部、全集編集部等の諸機関に於いて十分なる研究をするのであります。〔中略〕社長はじめ、調査部、全集編集部の全員、皆自分の翻訳だと云ふ意気込みで、苟も一字一句でも妥当を欠くやうな所や難解だと思はれる所あれば、訳者と膝を交へて研究するので、時には烈しい問答を重ねて、夜中の一時二時になる事も珍らしくありません。〔中略〕今度配本の『クオ・ヴァディス』の如きも、訳者木村氏が解説中に書かれてある通り、本社編集部の大宅氏が独訳との厳密なる対照をなせる外、更に同じ編集部某氏も、仏訳との対照に骨を折られました。本社は憚るところなく申しますが、内容に就いて斯く迄苦心を払っているものは、数多い全集中断じて他に一つもないのであります。

(世界文学月報 第 11 号「会員某氏へのお答」昭和 3 年 2 月 15 日 p. 7)

また、同月報には「翻訳の問題」と題する座談会の記録も掲載されている。これは翻訳者、作家、学者、編集者らが集った会で、その中で『世界文学全集』の編集に携わった大宅壮一が次のように発言している。

…〔『世界文学全集』には〕調査部と云ふのがあって、そこで先ず〔翻訳原稿を〕ずっと読んで行ってどうしても意味の通じないところに記しをつける。それを原書なり英仏独訳なりと対照して、そう云ふ風にやれば意味が通ずると云ったやうな参考訳を拵へて、訳者の所へ出かけていくのです。〔中略〕大へん有名な訳者で、立派な学者であると知られている人でも、其人の翻訳に分からない所が出て来た場合に、何とかして下さいと持って行くと、今度はまるで別な意味のことを書いて寄越す。〔中略〕だから、従来如く出版業者は、訳者の原稿其儘をおとなしく印刷すればいいと云ふ風な感じがなくなって、どんなえらい訳者でも誤訳をするものであると云ふことを、出版業者として悟った訳ですね。

(世界文学月報 第 13 号「翻訳の問題」昭和 3 年 4 月 15 日 p. 7)

この発言の後、誤訳悪訳を減らし翻訳の質を高めるためには大宅が言うように出版社がもっと積極的に翻訳に介入していくべきという結論に収斂していく。誤訳という言葉については大宅が意味するものとの他の参加者のそれとは意味合いが異なる部分もあり、さらに検討する必要があるが⁵、いずれにせよ訳者の誤訳に対して厳しい糾弾の姿勢を示す翻訳規範の存在が明らかである。だが、ここで強調したいのは、そうした誤訳への厳しい姿勢とともに、出版社側が「立派な学者」による翻訳に意図的に介入し始めるようになったという事実である。先述したように、それまでの外国文学翻訳は研究者たちの学究成果としてなされている傾向が強く、出版社はその学問的権威に頼って翻訳を出版していた、換言すればアカデミズムが翻訳を牽引していたと言っていいだろう。これに対し、上記の引用で大宅が述べているのは、そうしたアカデミズムが主導する翻訳出版のシステムを根本から変えようとする意識である。大宅は上記の座談会後に発行された昭和3年7月号の『新潮』に「知的労働の集団化の実例」という論文を発表し、翻訳という知的労働を孤立的にではなく集団化することで誤訳を減らすという論を展開した。

[今日の翻訳における] 最近需要の急激なる増大に乗じて、知的労働のこの分野に何らの熟練的技能を有しない知的自由労働者がここに殺到し、ほとんど收拾すべからざる混乱状態に陥っているのは何ゆえであるか。—それに対して私は、総じて知的労働の文筆的分野が今日なお封建的、孤立的、手工的迷蒙から脱却していないからだと答える。[中略] 翻訳が一つの独立した価値である以上、独立した評価の標準が決定されなければならない。翻訳における最高の指導原理は、なんといっても原作の伝えんとするところを、可能的に完全に移植することでなければならない。しかるに人間の頭脳は、それぞれ特殊な遺伝と特殊な経験の特殊な集合体である。したがって一人の人間の頭から生まれたものを、他の一人が完全に了解するという事は、この二人の人間の指紋を同一ならしむるよりもむずかしい芸当である。それゆえに翻訳から誤訳を完全に駆逐することは絶対に不可能である。それをできるだけ少なくする唯一の方法は、なるべく多くの人々の協力に待つことである。換言すれば翻訳を集団化することである。(大宅 1928/1981, pp. 29-30)

実際に大宅は昭和4年に「総合翻訳団」という集団を組織し、8年に解散するまで下訳や誤訳訂正、仕上げといった流れ作業で翻訳を行った(植田 1992, pp. 88-91)。上記の「世界文学月報」の座談会での大家の発言が、この文脈の中で、学者である翻訳者個人に翻訳を任せるのではなく出版社もそこに携わって集団化しながら誤訳を減らすという、翻訳の質向上を図

るための方策として述べられているのは明らかであろう。しかし、単に誤訳や悪訳の駆逐というだけではないだろう。翻訳出版を出版社の主導によって行うべきとする上記座談会での彼の主張は、先に考察した「翻訳の大衆化」というスタンスを、学術的で孤立的な姿勢での翻訳に任せるのではなく、出版社の方が主導権を握って進めていくという立場表明に他ならず、これは彼が主張する翻訳という労働の集団化を出版社が牽引するのと同時に、商業ベースに乗せて翻訳出版を主導しようとする姿勢として理解することができる。

このように考えることで、上述してきた「翻訳の大衆化」という目的と学問的権威の下で大衆を啓蒙しながら翻訳受容を主導するという、一見矛盾にも見える翻訳出版の方針が説明できるのではないか。すなわち、出版社は「翻訳の大衆化」というスローガンの下で、大衆に普及する翻訳を出版し、この翻訳出版の商業的成功を実現する意図がある。それと同時に翻訳の質を保証することを謳うが、つまりそれは世界人として現代の世界を読者に理解させるべく啓蒙的な価値を伴った翻訳を提供することを意味していた。それを実現するためには、アカデミズムの学問的権威と姿勢に読者を近づけるように誘導する必要がある。その一方で、それまでの銜学的なアカデミズム主導の翻訳では一部の学究的な読者にしか理解され得ず、翻訳の普及のためには不十分であることを述べ、大衆向けの翻訳を新たに購入してもらう妥当性を強調する。大衆化と啓蒙という矛盾する二つの目的を達成するためには、出版社がそれまで翻訳を牽引していたアカデミズムに介入し、その学問的権威を借りながら、大衆に普及できる翻訳を作り上げるためにコントロールすることが必然だったのである。出版社側が大衆とアカデミズムの両者に対しての矛盾を解消する方法として介入したと捉えることができる。

こうした翻訳編集意図は、以下の月報記事においても示唆されている。

近頃、外国文学の邦訳が漸く盛んならんとするは慶賀すべき事であります。だが、それ等は、通俗を主として興味中心の立場から作品を選択し、長いものは抄訳するといったやうなもので、その中に探偵物の多いことなどがその出版の性質を説明するやうに思はれます。かういふものももちろん結構です。が、本社の全集はそれ等と全く行く途を異にして、何処までも芸術本意、全訳本意に徹底するものである事は、申す迄もあるまいと存じます。

(世界文学月報 第11号「出版部より」昭和3年2月15日 p.7 下線筆者)

この記事は、改造社が昭和3年に『世界大衆文学全集』という外国文学の円本を新たに刊行する際の出版予告を受けて書かれたと推測できる。その出版予告では次のように述べられている。

健全にして而も近代人の感情を煽るもの、それを過去半世紀に幾十億民衆の心臓を激動し数百万部を売り尽くした伝記、恋愛、探偵、科学、家庭、怪奇、滑稽、軍事小説中不朽の名作中から選択し現代文壇人気の焦点たる一流作家にお願ひして大衆的名訳としたものが本全集だ、それに空前の廉価美装をもつて提供する、これこそ他に真似のできない大衆読物である。（改造社文学月報 第14号 「世界大衆文学全集予約募集予告」 昭和3年1月9日 pp. 8-12）

改造社のこうした大衆志向に対し、新潮社は上記の月報記事の中で、翻訳出版が盛んになり外国文学が大衆に普及していることを肯定しつつも、大衆には決して迎合せず、読者を啓蒙できる芸術性の高い作品を選択すること、そしてあくまで原典志向の翻訳を提供するという翻訳の規範を提示している。同社は、古典よりも同時代文学を主に扱う『世界文学全集』第二期を刊行する際にも次のように述べている。

・・・出来るだけ新しき作家、現代的意義の深い作家を集めて、「今日の世界文学」の面丰を伝へるに努めました。尚ほ、出来るだけ大衆的興味ある作品を加へる事にも特別の用意を致しました。更に、翻訳家諸氏とその作品との適合、それから生ずる訳筆の正確と洗練等に至つては、第一期のそれに優るとも劣らざること、ここに申すまでもありません

（世界文学月報 第37号 「第二期・世界文学全集・発表」 昭和5年5月27日 pp. 4-5）

ここでは「大衆的興味」に即していることが強調されるようになってはいるものの、「現代的意義」「今日の世界文学」を理解できる作品を、正確に原典志向の態度に即して翻訳するという姿勢は崩していない。そうした姿勢が『世界文学全集』の翻訳規範として揺るぎなく維持されていたことが読み取れる例である。

5. まとめとして

このように、円本（特に新潮社『世界文学全集』）は、外国文学の翻訳を売るという営利目的をおそらく最優先とする中で、アカデミズムと大衆に働きかける翻訳出版方針を作り上

げながら、外国文学の翻訳とは大衆に普及できるものであるとともに芸術性の高い原典の正確な理解を促進する、極めて原典志向で啓蒙的な翻訳規範を機能させることになったと言えるだろう。従来アカデミズムが主導していた翻訳の場に、そのあり方を批判して大衆志向を標榜しながら、一方ではアカデミズムの学問的権威を借りつつ、出版の商業的な成功に向けて周到に介入していくという新たな翻訳出版システムを導入したのである。こうしたシステムの中で、普及と啓蒙を翻訳の前提とする翻訳規範が機能していったのである。本稿ではこの点について新潮社『世界文学全集』を中心とする翻訳方針から考察したが、いくつか別の外国文学の円本月報からも引用したように、当時の外国文学の円本に共通した部分があったと考えられる。

ダムロッシュは、世界文学とは読み方のモードである、と定義している (Damrosch *op. cit.*, p. 297)。この定義に沿って考えるならば、『世界文学全集』をはじめとする外国文学の円本全集は、その翻訳規範を通じて、「世界文学」の翻訳について新たな読み方のモードを当時の読者に向けて提示したとすることができるだろう。例えば『世界文学全集』は、先に引用したように、「吾々は日本人であると共に世界人だ。その世界人としての資格を全うせしめる教化機関は翻訳文芸の外にはない」という意識下で、読者を「教化」するための世界文学を読むというモードを提示したのである。この読みのモードを実現するための翻訳のあり方が、普及と啓蒙を求める翻訳規範として提示されたのである。

こうした翻訳規範と外国文学を読むモードが、円本が刊行されていた昭和初期以降どのように変化していったのかについては、現在の翻訳受容につながる問題として重要な論点であり、今後の研究課題としたい。

※本稿は、2012年9月7-8日に開催された British Association for Japanese Studies Conference 2012 (University of East Anglia, UK) での発表内容に、さらなる分析にもとづく加筆・修正を加えたものである。

本研究は JSPS 科研費 23720144 の助成を受けたものです。

.....
【著者紹介】

佐藤美希 (SATO Miki) 札幌大学外国語学部／地域共創学群英語専攻准教授。専門は翻訳研究 (特に日本における英米文学作品の翻訳研究)、イギリス文学、比較文学。連絡先: mikisato@sapporo-u.ac.jp

.....
【註】

1 農村部などでは一円でも依然として高価な価格であり、数年後に円本全集が古書として安く流通するようになってから農業従事者の若者などによりやく入手可能になった状況が、永峰 (1999) によって示されている。

- 2 そのためには、イヴン＝ゾウハー (Itamar Even-Zohar) が提唱した多元システム理論 Polysystem Theory (Even-Zohar 1978/2004) とも照応し、日本の文学多元システムを再度詳細に検討し直す必要がある。この再検討については本研究とは別の考察としたい。
- 3 紅野(2009)や永峰(2010)は、改造社版円本と当時の普通選挙運動とを関連付け、改造社版円本の広告戦略が同社の社会主義主張を投影しており、経済的、政治的な意図が円本に重ね合わされていることを論じている。
- 4 上述した黒岩、森田、若松の他にも、研究者ではない翻訳者ももちろん多く存在していた。例えば昭和初期の作家が翻訳をしていた例については井上(2011)の著作に詳しい。
- 5 大宅はこの座談会の中で、原書や他言語訳との対照を行ってまで正確な訳の必要性を述べている一方で、文学作品の翻訳について「一字一句を語学的に味っているのではなく、全体の創作としての効果を味っている場合は、さう一字一句の区別にまでこだはる必要はない」「原作の味ひなり書かうとしているものなりを、本当に楽々と、日本の創作を読むのと変りないやうに読者に伝える」という翻訳観も同時に述べている。それに対する他の参加者の発言も含めて、ここで言われている誤訳・悪訳の定義は、他でなされている誤訳に関する言説とともに、当時の翻訳観を理解するために検討する必要がある。「世界文学月報」ではこの他にも、内藤濯による翻訳評(第17号昭和3年8月15日 p.4)、秦豊吉による翻訳評(第2期19号昭和7年8月25日 p.2)など、誤訳や忠実性などについての言説が掲載されており、それらの検討も必要であろう。ただし、本論の議論の本筋ではないため、ここでの考察は控える。

【参考文献】

- 青山毅(編)(1990)『文学全集の研究』明治書院
- 青山毅(編)(1990)『世界文学月報』(昭和期文学・思想文献集成資料 第4輯) 五月書房
- 青山毅(1990)「新潮社版円本『世界文学全集』について」『世界文学月報』(昭和期文学・思想文献集成資料 第4輯)五月書房:383-388.
- 青山毅(編)(1990)『改造社文学月報』(昭和期文学・思想文献集成資料 第5輯)五月書房
- 青山毅(編)(1991)『近代劇全集月報』(昭和期文学・思想文献集成資料 第10輯)五月書房
- 青山毅(編)(1991)『世界戯曲全集編輯たより』(昭和期文学・思想文献集成資料 第11輯)五月書房
- 百目鬼恭三郎(1986)『新潮社九十年小史』新潮社
- 藤木宏幸(1991)「『世界戯曲全集編輯たより』解説」『世界戯曲全集編輯たより』(昭和期文学・思想文献集成資料 第11輯)五月書房:373-383.
- ジュネット, ジェラルール/和泉涼一訳(1995)『パランプセスト:第二次の文学』水声社
- [仏語原文:Genette, G. (1982). *Palimpsestes*. Paris: edition du Seuil.]
- [英語訳:Genette, G. (1997). C. Newman and C. Doubinsky (Trans.). *Palimpsests: Literature in the Second Degree*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.]
- ジュネット, ジェラルール/和泉涼一訳(2001)『スイユ:テキストから書物へ』水声社
- [仏語原文:Genette, G. (1987). *Seuils*. Paris: edition du Seuil.]
- [英語訳:Genette, G. (1997). J. E. Lewin (Trans.). *Paratexts: Thresholds of Interpretation*. Cambridge: Cambridge University Press.]

- 井上健(2011)『文豪の翻訳力』ランダムハウスジャパン
- 犬塚孝明(2009)「ジャーナリスト山本實彦 ―若き日の思想遍歴と雑誌『改造』―」改造社関係資料研究会
(編)『光芒の大正』思文閣出版:231-262.
- 石井洋二郎(2000)『文学の思考』東京大学出版会
- 磯田光一 他(1990)『昭和文学全集別巻』小学館
- 小林一博(1976)「文学全集の販売」『言語生活』301号、10月:42-49.
- 小森陽一(1997)「翻訳という実践の政治性」川本皓嗣・井上健(編)『翻訳の方法』東京大学出版会:277-289.
- 紅野謙介(1999)『書物の近代』筑摩書房
- 紅野謙介(2009)『検閲と文学:1920年代の攻防』河出書房
- 李志炯(2003)「円本ブーム・金融恐慌・文学者」『文学研究論集』(筑波大学比較・理論文学会)21号:154-176.
- 宮武外骨(1928)『一圓本流行の害毒と其裏面談』有限社
- マンデイ, ジェレミー／鳥飼玖美子(監訳)(2009)『翻訳学入門』みすず書房
[英語原文:Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies* (2nd ed.). London and New York: Routledge]
- 永峰重敏(1999)「円本ブームと読者」『大衆文化とマスメディア』(近代日本文化論7)岩波書店:185-204.
- 永峰重敏(2010)「円本の誕生と『普選国民』」吉見俊哉・土屋礼子(責任編集)『大衆文化とメディア』ミネル
ヴァ書房:2-30.
- 日本の英学 100年編集部(編)(1969)『日本の英学 100年 昭和編』研究社
- 岡野他家夫(1981)『日本出版文化史』原書房
- 大宅壮一(1981)『大宅壮一全集』第1巻 蒼洋社
- 佐藤美希(2006)「翻訳序文に見る明治の英文学翻訳」『通訳研究』第6号:49-68.
- 佐藤美希(2008)「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」『翻訳研究への招待』第2号:11-38.
- 関口安義(1991)『近代劇全集』と長谷川巳之吉『近代劇全集月報』(昭和期文学・思想文献集成資料 第
10輯)五月書房:629-644.
- 「特集:文学全集」(1976)『言語生活』301号、10月:2-57.
- 植田康夫(1992)「大宅壮一の『知的労働の集団化』論が戦後の週刊誌編集に与えた影響」『コミュニケーション研究』22号:87-108.
- 山本芳明(2000)『文学者はつくられる』ひつじ書房
- 彌吉光長(1990)『未刊史料による日本出版文化 第五巻 近代出版文化』ゆまに書房
- Damrosch, D. (2003). *What is World Literature?*. Princeton and Oxford: Princeton University Press
[日本語訳:ダムロッシュ, デイヴィッド／秋草俊一郎他訳(2011)『世界文学とは何か?』国書刊行会]
- Even-Zohar, I. (1978/2004). The position of translated literature within the literary polysystem. In L. Venuti (Ed.),
The Translation Studies Reader (2nd ed.) (pp. 199-204). London and New York: Routledge.
- Hale, T. (2009). Publishing strategy. In M. Baker & G. Saldanha (Eds.), *Routledge Encyclopedia of Translation
Studies* (2nd edition) (pp. 217-221). London and New York: Routledge.
- Hermans, T. (1999). *Translation in Systems: Descriptive and Systematic Approaches Explained*. Manchester: St.
Jerome.

- Munday, J. (2012). *Introducing Translation Studies* (3rd ed.). London and New York: Routledge.
- Tahir Gürçağlar, Ş. (2002). What texts don't tell: The uses of paratexts in translation research. In T. Hermans (Ed.), *Crosscultural Transgressions* (pp. 44-60). Manchester: St. Jerome.
- Tahir Gürçağlar, Ş. (2010). Paratexts. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of Translation Studies* (volume 2) (pp. 113-115). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam: John Benjamins.

